

第何回目かの海峡物語 銀河の青函レース参戦記

赤石 隆

手術はやはりあけてみないと分からないものである。ヨットレースと関係のない書き出しで恐縮だが、部下達がやっているといっても手術が難航しているのに、見ているだけとはいえ上司が「じゃあねー」などと出かける訳にはいかない。何でも無い風を装いながらも、抜き足差し足更衣室に行つて時刻表を確かめ、最終新幹線の予約をしたが、こんなものはパーになり、無理矢理塩釜駅から乗ってやろうと企んだ北斗星の時刻も無情にも過ぎ去り、遂に「函館で会いましょう。」というメールを送る破目になってしまった。(結局どうも北斗星は塩釜にも青森にも停車しなかったようだ。)

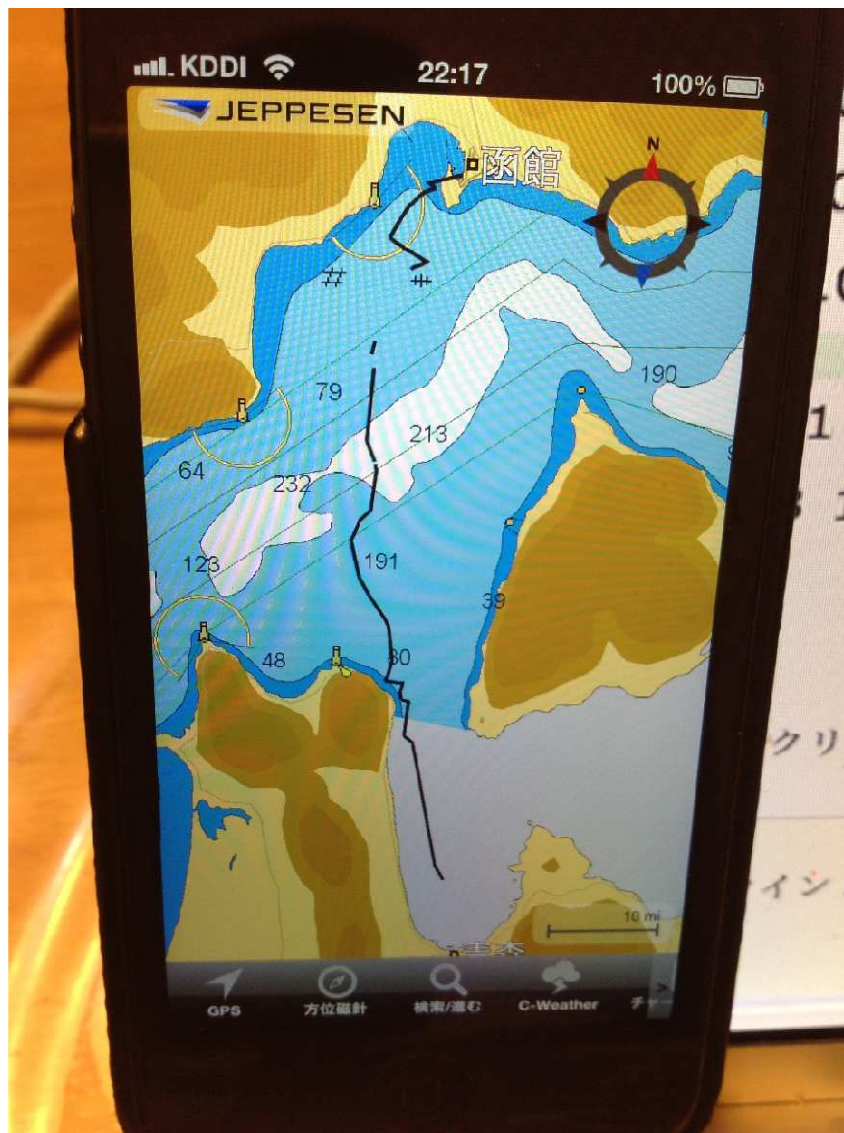
その頃、宝船「銀河」の面々はといえば、津軽情緒豊かな飲み屋で現れた調子の良い道化に対し、まるで大黒様か布袋様のようになって気前よくおひねりをばらまいて居たのだった。実はこの道化が恐山の化身であるとは誰も気がつかなかつたようだが。……

さて私はと言えば、夜が白々と明ける頃にすべてが落ち着き、ともかくも仙台始発の新幹線に飛び乗れた。さあどうする？例えば、青森港で釣り船か海上タクシーでも乗せてもらって乗り移るとか、フェリーから飛び込むとか他にもトラベルミステリーばりのトリックをさんざん考えたのだが、ありがたいことにメールで待っててくれるという返事を頂いたので、新青森からタクシーに乗り、停泊地のゲートを突破して岸壁に直接乗り付けた。ゲート入り口では時間に厳しい銀河の元艇長、鈴木先生がタイマーを片手に仁王立ちしていた。

この時期の青森は本当に素晴らしい。からりとした青空の下でねぶたの準備のお囃子が聞こえる。スタート地点は北の風5ノット。98馬力、インタークーラーターボの銀河はほとんどトップで本部艇付近からスタート。ヨットレースに馬力だのターボだのはおかしい訳だが、宮城外洋帆走協会における銀河のイメージはこうである。しかし、この日の銀河はイメージ一新の軽風での走り。角度もなかなか。快調に陸奥湾を滑ってゆく。

実はこのスタート、気鋭の(ひょっとして初めてじゃないの?)バウマンにより、強気のリードで早めにラインに達してしまい、ライン流しを始めたのだが、風下艇が減速してくれて追い出されずに済んだのである。三浦半島なら絶

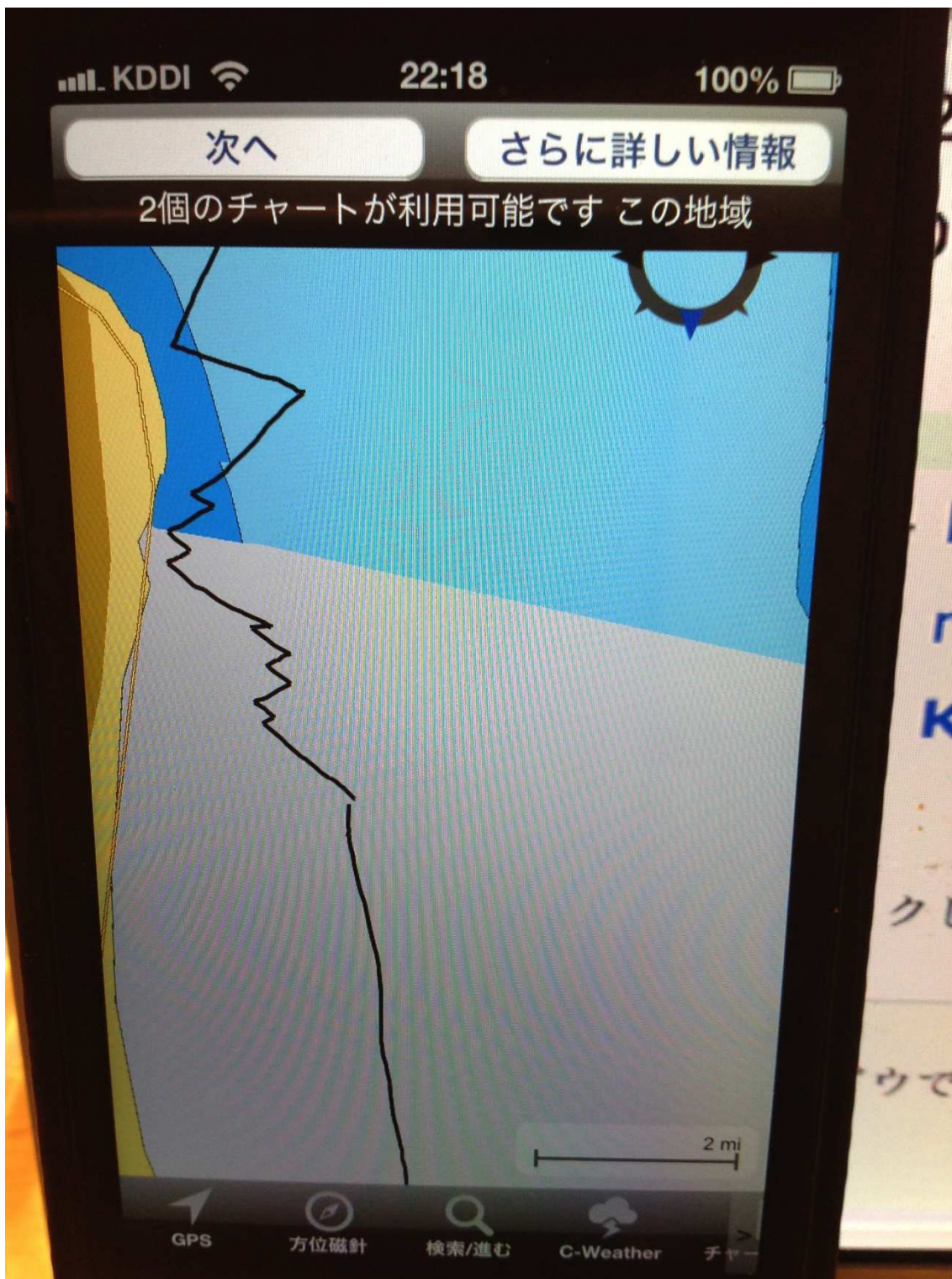
対こうはならない。それでもリコール旗が上がったのを、じーっと見てたら降りたからいいや、乗員誰もが何の根拠あってかきつと俺たちじゃないねといって、前を、輝ける未来を向くことにしたのである。



青函レースはいくつかの区間に分けて考えることができる。海図（地図でも可）で、青森から始めて①陸奥湾②平館海峡③平館と大間、竜飛崎を結ぶ3角形④竜飛、松前と大間、箱崎を結ぶ南西から北東への『帯』⑤函館湾。

① だけなら実に快適なヨットレースである。風を見つけながら銀河も気持ちよく進んできた。ところが、②は頭に「魔の」という字がつくところである。(MORC の過去のレポート参照)果たして、ぼったり無風になってのたうち回ることになった。同じ浮き球に、近づいているのいや離れているの

と、それでも1時間半ほどで抜け出し、③に入ることになった。(航跡の拡大 図 参 照)



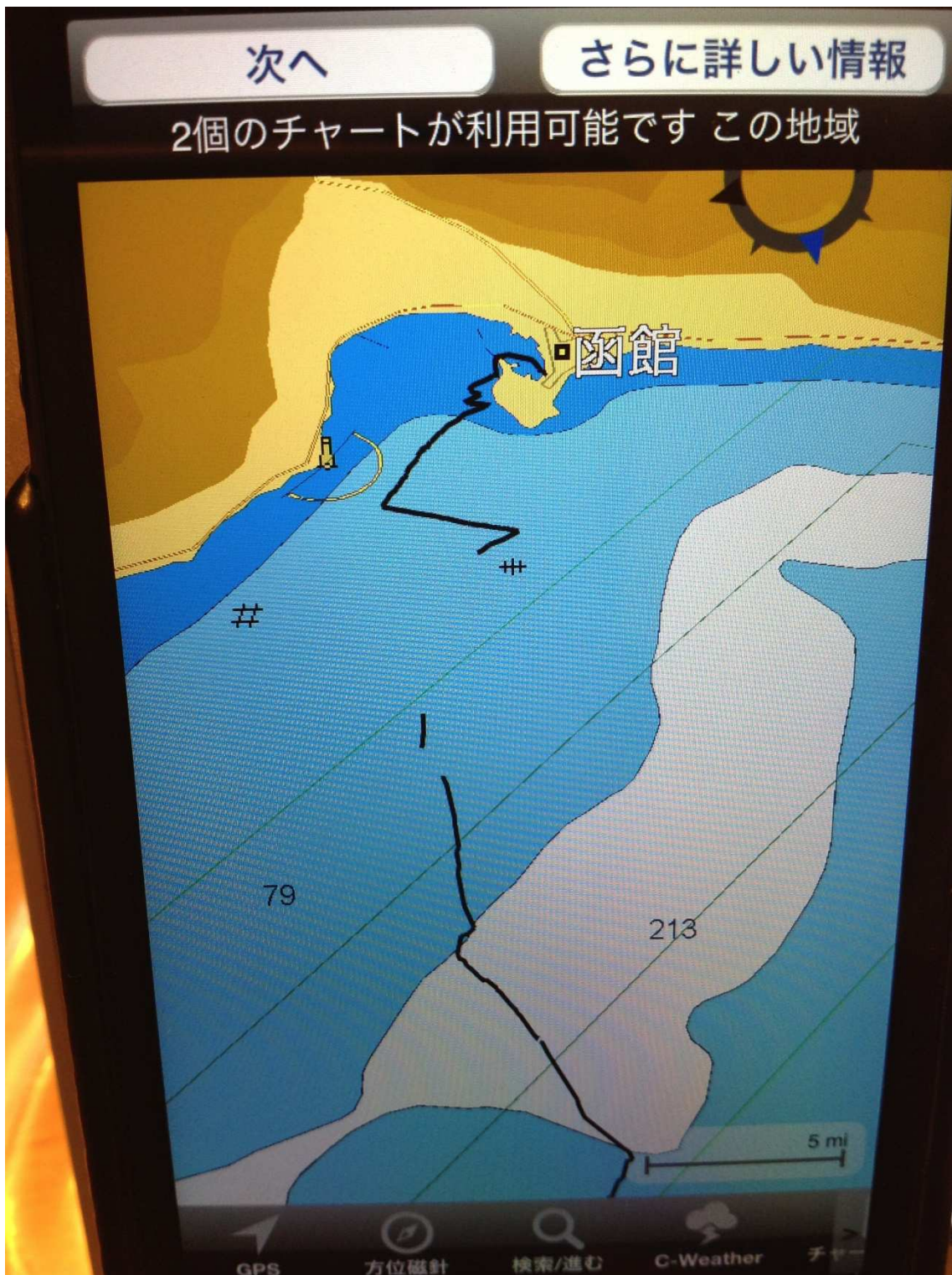
ここは回航の際に偵察済みである。風はそこそこだが、函館スタート、青森ゴ

ールなら、第2回目の海峡物語で我妻さんが書いている通り、『下北エクスプレス』の場所で、海流が下北半島を陸奥湾方向に下ってくる。今回は逆のケースであるから銀河は津軽半島ぎりぎりを進んでゆく。竜飛崎を見ながら、素晴らしい海峡の夕焼けとなった頃、いよいよ『帯』にたどり着いた

『帯』は要するに川、南西から北東への川である。ちゃんとさらさら流れているのが分かるし、所によっては6ノットにもなる。素晴らしい夕焼け、ということは要するにまずいところで凪ぎになったのである。船首は松前の方に向けているのにGPSでは、ぐぐっと明らかに下北半島は大間の方へ向かっている。そしてはるか西よりをとっていた先行艇が我々のところまで流されてきて、結果的に追いつくことになった。私には以前、流されて下北半島の斧の刃の部分まで行き、ザバザバと音を立てて海水が巻き込んでいるのを経験したことがあり、以来トラウマになっている。

夕闇迫る頃、バウからの提案で、銀河とっておきのジェネカーを上げることになった。これが抜群の効果で、するすると先行艇を抜き去り、川を渡りきることができた様に思えた。結果論だがもう少し流されても良かったのかもしれない。

川を渡ったあと、日はとっぷりと暮れた。ここで私の位置誤認が起きる。風はほとんど無くなった。この部分の航跡の記録がないのはバッテリー切れによる。右手の高台にある建物の光を、下北半島のものと思い込んだのである。実はこれが函館山の頂上の灯火だというのが分かったのは、いよいよ間近になってからであった。北極星を同定して居たのだから冷静に判断してコース決めておけばもっと上位に行けたと思われる。実際、夜が白々と開けて、視界が開けてみると、函館港前に先行艇が2杯居たのである。ロングレースは夜が勝負というのをいつもながら思い知らされる結果となった。



エピローグ

我々が着岸した摩周丸のとなりは広場となっており、島谷さんが太陽の照り

つける、水がお湯になってしまう灼熱のコンクリートの上に直接大の字になり熟睡。となりには関口艇長がどう言う訳か背広姿で熟睡していて、当日の晩行われる花火大会のために会場整備に入ったフォークリフトにそのまま片付けられそうになっていた。一方、少し離れたビットに腰を下ろしてしばし放心状態となっていたムーンライトエクスプレス艇長に、男が近づいてきて「あなた、何か困ったことはありませんか。」とって名刺を差し出した。薬物乱用、ホームレス対応係と書いてあったそうで、「泊まる場所あるの?」「あるけど」「クスリとか酒とかやるの?」「酒は飲むけど。」「あーやっぱり。困ったらいつでも相談してよね。」男は自分だけ納得した様子で立ち去ったそうである。同様の声がけはサバの関口さんにもあったらしい。如何に内に大志を秘めていたとしてもオーバーナイトレースを戦った我々の外見には他者を納得させるそれらしい雰囲気は漂っていたものと思われる。

それらの諸々の思いを、レース委員会の計らいで函館郊外の湯の川温泉で洗い流し、勇躍表彰式の3階へ受付にいくと、私のロゴ入りのシャツを見て、「あ、銀河だ。」オオー有名だな。ひょっとして入賞でもしたかななどとおもったら、ちょっと来なさいと別室に呼ばれて、そこへ直れ。「アー私はジャッジですが、おたくはリコールしてたんです。戻らないもんだから、審判の判断で5%のペナルティを科しましたのでどうか承知してください。」「へい、寛大なお裁きまことに恐れ入りやす。」

という訳で、レースそのものがパーにならなかつただけでもありがたく思うことになったのでした。

来年は逆コースの海峡物語。どなたがお書きになるのか、お楽しみに。あ、本編はフィクションと思って頂いた方が良いでしょう。